

## アクション・リサーチのまとめ

学校名 吉城高等学校

研究年度 19 年度 研究対象 (学年クラス等) 1 年 生徒数 157 名

科目名 英語 I、O C I 単位数 7 (6 : 理数科) 使用教科書名 UNICORN, Empathy

### クラスの様子・特徴

普通科 3、理数科 1 クラス。理数科はほぼ全員が進学希望、普通科は就職、専門学校、大学進学希望と多様。授業には落ち着いた態度で臨める。

### 問題の特定

中学校の既習事項である基本的な文構造を把握していない。語・文単位で把握できても、物語全体を把握することは困難な生徒が多い。英語に対する苦手意識が強い。効果的な自主学習の方法がわかっていない。

### 現状把握

#### A 授業観察

理数科は普通科より積極的に取り組む傾向がある。ペア・ワークは楽しんで取り組めるが、全体の前で発言することには抵抗を示す。発問の答えが、単語レベル、教科書からの抜き出しである場合には答えられるが、要約など、まとまった英文を自分で作るようなタスクには困難を示す。

#### B GTEC

Reading 及び Listening では、表面に言葉として表れている事柄を断片的にとらえることができても、話の概要をとらえたり、背景を憶測したりするところまではできていない。Writing では正確さには欠けるが、課題に沿った内容を展開できる生徒が多い。

#### C 質問紙調査

家庭学習時間が少ない。自主的な学習姿勢が育っていない。英語学習の目的を受験や成績と答えた生徒は少数。ペア・ワークの課題は多数の生徒が自信を持ってこなしている。

### リサーチ・クエスチョン

文法学習を表現活動と結び付けることにより、基本的な英文の構造を把握するとともに、英語による発信力を付けることができるのではないか。

### 仮説・実践・検証

#### 仮説 1

目標文法を文脈の中で提示することにより、スムーズにインプットができるのではないか。

#### 実践 1

テキストに沿った文法項目を含む短い話を導入教材として使用する。

#### 検証 1

導入から説明にスムーズに運ぶことができ、生徒は新出構文を無理なくとらえることができた。

#### 仮説 2

目標文法を使用する場面を設定することにより、文法をコミュニケーションの道具として習得し、より複雑な表現ができるようになるのではないか。

#### 実践 2

既習文法を使って 3 文英作を行う。  
特定のトピックで、ペア・ワークのプロジェクト (ダイアログ・新聞記事 : 年 5 回) を課す。  
特定のトピックでエッセイを課す。

#### 検証 2

オープン・エンドな課題に意欲を持って取り組めた。  
クラス全体の前でも発表ができるようになってきた。少しずつではあるが、複雑な構造の文を用いて表現できるようになってきた。

## 研究の成果

文脈のない演習問題のテキストを短い話の導入・表現活動と組み合わせることで、文法指導をコミュニケーション活動の中に位置付けることができた。表現活動に進んで取り組めるようになってきた。まとまった英文を添削することで、生徒の弱点を把握することができた。エッセイ・ライティングの力がついてきた。

## 今後の課題



表現活動の際に、構文への意識が薄れ、正確さに欠く部分が見られる。Peer editing や効果的な corrective feedback を工夫し、間違いに自ら気づき訂正できるようにする。トピックを身近な物からより深い思考力と調査が必要なものにしていく。読解・聞き取りが弱いので、多読教材 (grade reader) 等の活用を促す方策を考慮する。